

柳田民俗学の組織化

— 橋浦泰雄絵画頒布会に見る —

鶴見 太郎¹⁾

一 はじめに

戦時下に行われた柳田民俗学の組織化についてひとつの節目を設けるとすれば、1935年7月の柳田国男の還暦を祝って開催された「日本民俗学講習会」を契機とする、「民間伝承の会」の結成であろう。柳田自身によって直接指導を受けた民俗学者が運営する、この全国規模の研究団体によって、これ以降、柳田民俗学は文字通り地方の末端までその影響を浸透させていく。

こうした組織化の過程は民俗学史、あるいは柳田国男研究の側からこれまで着実に検証が重ねられており、その動態が明らかにされている。さらに近年は地方史からも柳田の民俗学を受容し、現地でその展開を担った側の視点を含んだ、見るべき成果が上がっている（1）。

これらの研究史の上で、ひとつの問題点となるのは「民間伝承の会」の成立によって、それまで各地に散在していたおびただしい郷土研究者が、郷土観をめぐる多少の違いこそあれ、民俗採集とその情報交換に重点を置いて互いに結束する研究基盤が整えられた反面、それぞれの郷土研究者が持つ個性が見えにくくなった点であろう。柳田が各地の郷土研究者を「小さな丸薬」と形容したように、機関誌『民間伝承』にならんだ各地からの報告も、あくまで調査する側から主観を廃する柳田の意向に添った、直截な採集報告が基調となった。

かつて岡正雄は柳田民俗学の環境を「一将功成て万骨枯る」（「柳田国男との出会い」『柳田国男研究』第1号 1973年）の学と評したが、その言葉の背景には、かつて1920年代中葉、柳田と共同で編集した『民族』に毎号、個

性の強い投稿者によって、特色のある論考が掲載されていた実績を、既に日本民俗学が持っていたという事跡があった（拙稿 「柳田民俗学と「民間伝承の会」」『東北学』第2号 2000年）。その岡にとって、1935年9月に創刊された『民間伝承』は、明らかに大正末から民俗学が持っていた可能性の一部を消し去ったと見えたのである。

事実、『民間伝承』の内容に即する限り、各地の郷土研究会を繋ぐ横のネットワークを重視したことが、帰納的な柳田の方法と相まって、そこにひとつの体制化をもたらしたことは否めない。「民間伝承の会」の成立によって、中央の研究者と地方の採集者の格差は一段と強くなったといっている。

ただし、柳田民俗学が作った人的交流の輪それ自体については、いまだ少し考える必要がある。体制化していく柳田民俗学を「民間伝承の会」及び『民間伝承』に代表される組織のみで説明することは必ずしも、その諸相を十分説明するものではない。柳田民俗学によって築かれた人間関係とは、柳田国男個人に属するものの以外に、柳田民俗学そのものが持つ方法、態度、姿勢を媒介にして形成されていく要素を持ったものも含まれ得る。その意味で柳田民俗学の人的交流は柳田その人から離れた形で形成されていく可能性を持っていた。

以上の条件を念頭に置きつつ、小稿は大正末から戦後に到るまで柳田国男に師事した日本画家にして民俗学者、社会運動家・橋浦泰雄の活動から、特に彼の周囲で開催された絵画頒布会に照準を合わせて、その事業を取り巻く人的交流、組織運営のあり方を検討する。そしてその中に民俗事象の採集、報告、比較総合という、

1) 京都文教大学人間学部臨床心理学科・助手

こんにち定式化されている柳田民俗学の体制とは質を異にする、自主的な好事家を担い手とする文化運動としての性格を読みとろうとするものである。

後述するようにこの一連の絵画頒布会は戦時中を含んで、一部の社会主義者をも巻き込むという、人脈の上でも振幅の広いものであり、断続的だが戦後に到るまで繰り返し行われた。多様な人物によって構成されながら、橋浦泰雄を支援するという一点に於いて、彼らは共通していた。

二 橋浦泰雄絵画頒布会の位置づけ

橋浦泰雄（1888～1979）の経歴については、別稿（2）で既に多くを言及しているので、その特色に関してのみ手短かに紹介するに止める。柳田国男に戦時下、幾人かのマルクス主義者が入門するという現象を説明する時、しばしば橋浦はその一典型として登場してきた。だが思想面に於いて彼がどれだけマルクス主義を摂取していたかは、必ずしも明確でない。文献として彼が最も精読したのは青年期、明治末に郷里の鳥取で読んだクロボトキンの『相互扶助論』であり、マルクス主義運動の最盛期にあたる1920年代後半、柳田の門をくぐり、民俗調査に従事した最大の理由も、日本の僻村に於ける相互扶助と共同耕作が徹底された「原始共産制」の遺制発掘を志し、その指導を乞うたためであった。

生前の橋浦は自らを「マルクス主義者」というよりも、むしろ「コミュニスト」と呼んだ。このことはクロボトキンがしばしばその叙述の中に「無政府共産制」という言葉を使用しているのに対応しているといっている。

1920年代初頭のアナ・ボル対立に際して、橋浦自身はボル派に与するが、それによってそれまで旧知のアナキストたちとの関係が終わったわけではなかった。例えば官憲による虐殺がなければ、大杉栄との交遊は震災直後、共通の友人で叢文閣社主だった足助素一を両者が見舞ったことで、むしろこれから深まり得る予感を秘めていたし、黒耀会を通じて知り合った望月桂

をはじめとするアナキスト芸術家との交流も依然、続いていた。望月は1920年4月に開催された黒耀会第1回展覧会の方針に対して、芸術は本来製作者の内にあることを主張し、会での審査不要を説いたことがあり、橋浦自身そうしたアナキストの芸術観・人間観を後年、高く評価した（3）。模索の時代にあった青年期を除けば、橋浦の画風が素朴で必ずしも洗練されたものとはいえない筆致であることは、彼が審査による競争とは無関係な創作を目指したアナキストによる芸術活動を一度通り抜けたことと無関係ではない。

このように同時代の政治潮流とは別個に、個人そのものに信を置くことを交流の尺度とする点で、橋浦の人間関係は時局を問わず、すぐれて現場を通じた経験的なものだった。

プロレタリア文化運動が旺盛な運動を展開した20年代後半から30年代初頭にかけて、橋浦もまたナップ（全日本無産者芸術聯盟）中央委員長をはじめとする幾つかの重要な役職を経験するが、その最中にあっても、こうした経験的な姿勢は変わらなかったと見られる。

こうした橋浦の思想像を考証する時、特に信頼に値する素材となるのは、橋浦が残した著書以上に、彼を取り巻く人々が彼に向けて発信された情報（書簡、ビラ、パンフレットなど）の方が重要性を帯びる。橋浦の交遊録を見る上で特徴的なのは、戦前期の運動家にしばしば見られる運動離脱にともなう人間関係の急激な変化が、見あたらないことである。

敗戦を迎えるまでの橋浦は度重なる弾圧によって運動の重心をプロレタリア文化運動から、消費組合活動、そして最終的には「民間伝承の会」の組織化へと移していくが、解体・壊滅したそれまでの組織で培った交友関係は依然として残った。したがって橋浦に宛てられた書類の中には、或る運動が解体、衰微して以降も、組織で得た知己との交流を示すものが数多く含まれる。そして新しい運動に比重が移ると、書類の束にその運動関連のものが付加されるのであり、運動そのものは壊滅したとしても、運動に従事したことによって橋浦が得た知

己との文通は残り、個人的な交流としては新しい組織の運動と同時進行していく。

小稿はそうした橋浦の人物交流の特色をとりわけよく匂わすものが、彼の個展、絵画頒布会をめぐる事業運営ではなかったか、と捉えることを出発点にしている。いうまでもなく、この事業を通じて橋浦を支援しようとした人々は、橋浦が青年期以降、その時々には置いて身を置いた運動組織にゆかりの人たちだった。したがって橋浦の個展、絵画頒布会は、そのまま彼の運動歴に対応し、かつそこで積み重ねられた人間関係が凝縮されているのである。

日本画家としての橋浦は彼が尊敬した富岡鉄斎の影響を受けつつも、生涯特定の師についたことはなく、自らを「画工」と呼んだ。そして創意を全面に押し出した青年期を除けば、人生の大半を依頼者の注文に応じる職人的な画家であることを旨としていた。プロレタリア文化運動期の1926年には共同印刷争議の支援で、柳瀬正夢、村山知義らと街頭似顔絵市場を開き、即興で似顔絵を描いて運動資金を集めたし、戦時には『民間伝承』編集長として、表紙絵からカットのほとんどを担当し、十二分に職人としての技量を示した。また、柳田に師事するようになって以降は、個人的に選ぶ画題も旅先の景観や道祖神をはじめとする民俗的な素材が多くなり、それらを癖のない淡い色調の画風によって描き込んだ作品が個展、頒布会に並んだ。

この企画に集った群像をその事業運営とともに検討することで、そこで得られた人間関係、活動の一部が、やがて橋浦泰雄自身の活動を通して民俗学の組織化へと連なっていく過程を素描するのが小稿の目的である。

なお、橋浦の絵画頒布会、個展自体は1922年から始まっているが、小稿では橋浦が『民族』への投稿、「民俗学会」への入会・退会などを通して直接、民俗学の組織に関わり出した1928年以降を対象にする。

三 小品画会（1928年）の背景

1928年5月、橋浦をめぐる「小品画会」と銘打った頒布会が開催される。名目は橋浦の

「仕事と貧乏」を助けるためのものであった。ビラに掲載された協力者の顔ぶれを見ると、柳田を始めとして足助素一、秋田雨雀など、運動・民俗学にかかわりなく、橋浦の知己が並んでおり、橋浦に対する信頼の度合いを示している。実際にビラが渡った範囲はごく限られた人々に止まったが、「3・15事件」の余波がまだ醒めやらないこの時期、当時ナツプ中央委員長の要職にあった橋浦を援助するということが自体、危機を孕んだものであり、慎重を要するものだった。

一方、発起人の一人となった柳田自身もこの時期、学界組織と自身の民俗学の両面に於いて深刻な状況にあった。もともと柳田は民俗学が欧米の民族学に比して理論、事例蓄積の両面に於いて立ち後れていることに危機感をつのらせており、その意識は当時、柳田が岡正雄と共同で編集していた『民族』の編集をめぐる対立となってあらわれる。具体的には欧米民族学の成果を紹介する岡、折口信夫、金田一京助らと、直截な地方の郷土研究者からの民俗報告を掲載し、彼らとの結節点を探ろうとする柳田の相違が号を追う毎にはっきりしだし、両者の確執はもはや避けがたいものとなっていった。

この対立は1929年4月、同誌が終刊することで決着を見る。これと前後して岡は折口信夫らとともに1927年、「民俗学会」を設立し、機関誌『民俗学』を発刊するが、柳田はこれに加わらず、橋浦も当初これに入会したものの、やがて柳田と歩調を合わせて退会する。

地方に散在した郷土研究者との接点をひとつの雑誌上に模索しはじめた点で、『民族』は柳田自らが民俗学の組織化に乗り出した初めての試みであった。民俗学者としての橋浦が登場したのも同誌の採集報告欄（1926年3月号）であり、橋浦自身もまた組織化に向けて呻吟する柳田の編集ぶりを目の当たりにしていた。「小品画会」はいわば『民族』誌上をめぐる対立の狭間にあって行われた。

個展という形式こそとらなかったが、「小品画会」を通して橋浦の絵を購入した人々の一部は明らかに『民族』を通して知り合った面々で

あった。岡正雄は勿論、岡茂雄さらに岡兄弟の先輩格にあたる岡村千秋、渋谷敬三など、この時期、柳田と緊張関係にあった人々もこの事業については積極的にに関わり、橋浦を支援している。『民族』編集上の確執が表面化しているこの時期、橋浦という人物を助けるという別個の目的で協力し合ったのである。

もうひとつ注目すべきことは、この画会に参加した時点で直接、民俗学とは関係の薄い人物でも、その後の行程で、「民間伝承の会」の活動に関わっていくことが多い点である。例えば社会主義者の弁護士・山崎今朝弥は、1920年12月、橋浦と共に日本社会主義者同盟の設立に参加した運動仲間であり、画会に参加した動機は、もっぱら運動の延長であったと思われる。しかし敗戦直後、山崎はいちはやく橋浦に宛てて『民間伝承』の購読を希望しており（4）、橋浦との交流の過程で次第に民俗学に傾斜していったことをうかがわせる。

同様の位置を占める人物に、鳥取出身の文士・吉村秀治がいる。もともと吉村は撫骨の筆名で青年時代、鳥取に於いて橋浦や白井喬二、野村愛正らとともに同人誌『回覧』、『水脈』を刊行したサークル仲間であり、同郷のよしみでこの画会に加わった。やがて1935年7月、鳥取から「日本民俗学講習会」への聴講者を送るにあたって、吉村は橋浦の相談を受け、選定を行っている。

おおむねこの時の事業メンバーがこれ以降、橋浦の絵画頒布会の基礎となっていくのである。

四 地方への浸透

（1）松本での画会

信州の東筑摩郡は柳田がとりわけ重点的に民俗学の育成に力を注いだ地域である。既に大正初期から柳田に私淑していた胡桃沢勘内によって、大いに地元郷土史家の間に柳田民俗学の支持層が形成されていた（5）。「民俗学会」をめぐる確執から、30年代初頭、孤立していた柳田にとって、交歓の機会が多かったのはむしろ地方の研究者の方だったが、信州はその最たる

地域だった。

1920年代の終わりから30年代、この地域に於ける柳田民俗学の組織化に決定的な役割を果たしたのが、孤立していた柳田にほとんどただ一人従っていた橋浦であり、具体的にその媒介項となったのが、彼の個展、頒布会であった。直接の機縁となったのは東筑摩郡の教育委員会から同地の道祖神の調査を委嘱されたこと、そして個人的に胡桃沢ら在地の郷土史家との交流が会を追う毎に深まっていったことが挙げられる。

信州に於ける最も早い橋浦の絵画頒布会は1929年5月、松本市内で開催された「橋浦泰雄君画會」である。胡桃沢の手に掛かるこの会の「趣意書」は同地に於ける橋浦の捉え方が活写されていて興味深い。この中で胡桃沢はかつて天明4年、この地を訪れた漂泊の文人・菅江眞澄に橋浦の姿を重ね合わせて紹介し、東筑摩の地を訪れる橋浦を親しみをこめて描いている。

この画会に前後して東京では「4・16」事件によって、共産党系の労働運動、ならびにプロレタリア文化運動は大打撃を受けていた。たまたま橋浦は画会準備のため、4月上旬から浅間温泉に滞在中で、はからずも検挙を逃れることとなった。

この時点で橋浦は依然として東京ではナップ傘下の日本プロレタリア美術家同盟（AR）の主要メンバーとして活動しており、運動筋からの依頼に応じて多くのポスター、チラシを即興で描いていた。それらの仕事は描き込まれたスローガンを含めて、こんにちの分類から見れば、明らかにプロレタリア芸術に属するものであり、少なくとも当時、画家としての橋浦はこちらの方に重点を置いて活動していた。つまり、信州に於いて胡桃沢が位置付けようとした素朴な道祖神のスケッチに代表される「民俗画家」とは、明らかに東京とは異なる新しい橋浦像だったのである。

こんにち資料から跡づけられる限り、戦前期の橋浦は信州に於いて政治活動を行った形跡はない。わずかに日記から消費組合のために椎茸、野菜などを地元の農家から出荷したという記述が散見されるのみである（6）。平素から

政治活動と民俗学を峻別することを旨としていた橋浦だが、彼の地でもその姿勢は変わらなかったといえよう。胡桃沢の位置づける橋浦像が、同時代の東京の橋浦像と違っているのも、その現れであり、在地の同好の士が橋浦に寄せた信頼の大きさを示している。

この時の画会を皮切りに、松本を中心として橋浦の絵画頒布会が翌30年、31年、33年、34年と断続的に開催され、いずれも成功をおさめている。特に31年5月の「橋浦泰雄君畫番茶器頒布會」は、地元の知己たちのみによって計画され、橋浦が絵付けした番茶器が頒布された。

一方の柳田は、29年5月、松本を訪れ胡桃沢と交歓した際、愛読していた「眞澄遊覧記」の復刻版出版の計画をまとめ、事務局を松本に置くことを決定している。この計画はやがて30年、地元の大成堂書店から『眞澄遊覧記信濃の部帙』として刊行されるが、柳田による序文のほか、限定版には橋浦の肉筆装画が加えられた。柳田自身は信州での画会でも終始援助を惜しかなかったが、31年の画会の際にも、地元だけの運営であることを知らずに、自身の名前をどのように使っても良いとの手紙を橋浦に宛てている（7月9日付）。

頒布会が行われる過程で、橋浦は信州の地で「民俗画家」として認知され、中央での学界対立から離れて、民俗学の交流を深めていったのである。同時に橋浦の迎えられ方の中には、菅江眞澄の生き方に重ね合わされたことに見るように、民俗学者としてよりも、郷土色の強い絵画を残す旅人としての側面が地元側から強く打ち出され、かつ柳田自身の刊行事業とも交差する形でその活動が展開される点から見て、明らかに支援の受け方は全国の民俗学組織を射程としたものとするよりも、地方の好事家の自発的な企画と庇護を受けたと見る方が妥当である。それは明らかに強い統制に基づく組織の論理とは異なるものであった。

（2）鳥取での画会

信州で位置づけられた「民俗画家」としての橋浦泰雄という形象は、1930年6月、郷里の鳥

取で行われた頒布会でもはっきり影を落としている。ここでの発起人は東京側から柳田、秋田雨雀、白井喬二、野村愛正が出て、鳥取からは吉村秀治、近藤守蔵ら橋浦の旧友が名を連ねた。

もともと橋浦は昭和期の社会主義者に珍しく、上京して運動に従事するようになってからも、東京と故郷・鳥取の間を往還し、30年代に於ける弾圧と運動の後退の時期を含めて、郷党の仲間との交流を大切にした。

実際、1922年11月、鳥取市内の仁風閣に於いて橋浦は既に小規模な個展を開いていた。当時の橋浦は、アナ・ボル論争の渦中にあり、次第にボルシェビズムに傾斜しはじめた時期にあったが、パンフレットに記された詩篇「我が愛する同胞よ！」には、「永遠の旅の子の私は/自らの光と路とを追ひ求めて/果てしなき青空の下に/無限の旅路を見なければならぬ」と、いまだボルシェビズム以前の人道主義に基づく社会主義の影響を色濃く残していた。その意味で鳥取で計画された事業を見ることは、そのまま橋浦の思想・活動の力点が推移する様を見ることでもある。

1930年当時、橋浦は依然としてARの委員をつとめ、運動の中枢に位置しており、頒布会に先立つ5月24日から3日間、鳥取自由社主催で秋田雨雀、尾崎翠らとともに行った文芸思潮講座では「プロレタリア芸術の現勢」と題して講演した。実際に「趣意書」の文言も、「井蛙的保守主義、モダンの追随主義が滔々として日本を席卷してゐる現在、特に時代の一尖端に立てる彼の作品が・・・獨自の一境地を開拓しつつある」と、プロレタリア芸術の色彩が強いものとなっている。

その一方で、同じ「趣意書」に並んだ絵画のタイトルを見ると、「上高地小景」、「道祖神圖」、「岩手気仙海岸」、「山路の秋」など、ほとんどが民俗、或いは採集紀行で橋浦が写し取った景観を素材にしたものである。これは前年の信州での画会の余韻をそのまま引き継いでいるといってい。

プロレタリア芸術家として帰郷を果たした側

面が強い一方で、次第に「民俗画家」としての性格を橋浦が打ち出していく途上に位置するのが、この時の鳥取に於ける頒布会であった。

(3) 新潟での画会

1939年7月15・16日、橋浦は新潟市の万代デパートで「民俗小品個展」を開催した。タイトルが示す通り、はっきりと橋浦を「民俗画家」として捉え、主催した団体も同地の郷土雑誌『高志路』発行所である高志社である。『高志路』は小林存が主力となって、1935年1月、新潟県民俗学会の機関誌として創刊され、戦時下を通じて柳田民俗学を地方から支えた有力な郷土研究会のひとつであった。画会で賛助員となった人物中、民俗学関係者を挙げると、東京側から柳田、洪沢敬三、金田一京助、折口信夫などが名を連ねている。

前述した通り、1935年7月の「日本民俗学講習会」の成功によって、長期にわたって続いていた「民俗学会」をめぐる学界対立に終止符が打たれ、同年8月、「民間伝承の会」が結成されることによって、日本民俗学は組織の上では柳田を中心に、ほぼ統一されることとなった。

橋浦自身はこの時既に、たび重なる弾圧によって運動の重心をプロレタリア文化運動から消費組合活動へ移し、さらに37年以降、ほとんど運動から身を引いて、活動の場を「民間伝承の会」に求め、1938年9月から機関誌『民間伝承』の編集長の職にあった。個展のチラシもそのことを受けて、橋浦の肩書きを「民俗学中央誌『民間伝承』編集主任」とし、運動家としての橋浦の経歴には触れず、あくまで民俗学者として遇し、この画会の基調を斯学興隆に絞っている。橋浦の画風について「日本民俗学徒の獨自性によつて作られた畫日本的なるものゝのはつきりとピントに合つた印象の射影である」(7)としたように、「民俗画家」としての橋浦像は、地方の民俗学研究者の間で既に定着したものとなっていた。

(4) 1937年の頒布会

1937年に東京で行われた頒布会はその規模が

ら言って、橋浦の前半生に於けるひとつの総決算ともいうべきものである。

橋浦が自宅兼アトリエを購入できるように、というのがこの頒布会の目標であり、目標額と運営規模から言って、これまでで最大のものだった。発起人はおおむねこれまで同様、柳田をはじめとする橋浦の周囲にいる有識者達だったが、具体的に購入者としてこの事業を支援した主要な部分のひとつが、それまで橋浦が地方で培った人脈によるものだった。主立った人物では鳥取から吉村秀治(撫骨)、信州から胡桃沢勤内、そして昭和初年から数回橋浦が民俗採集に赴いた長崎県五島からは久保清、そしてかつてのナップの同志で運動離脱後、郷里の飛騨高山に帰り、郷土誌『ひだびと』の編集にあっていた江馬修などである。橋浦は生涯を通じて五島の海と島の風景を何度も描き、それらが地方の頒布会に廻ったし、運動離脱後の江馬とも頻繁に連絡を取り合い、「日本民俗学講習会」の聴講者選定を相談していた。

購入者の中でとりわけ目を引くのが信州の知己による結束力の堅さである。同地の郷土研究者の中から代表して佐野貫太郎が33名分を一括して購入し、最高額の330円を支払っている(8)。多くの支援者に支えられ、同年末、久我山に橋浦の自室兼アトリエが完成する。同所を発行所に橋浦は戦時下、『民間伝承』の編集発行を続けるが、この頒布会はそれまで橋浦が「民俗画家」として地方に向けて行ってきた組織化の成果が、人間的な信頼として自らに還ってきた側面があるといえよう。

五 「橋浦さんをねぎらう会」

戦後も橋浦の絵画頒布会、個展は幾度となく行われ、その都度、民俗学者としての肩書きが強調されるが、事業そのものが民俗学の組織化につながることは次第になくなり、日本画家・橋浦泰雄個人の展覧会という色彩が強まっていく。戦後の橋浦はいち早く共産党に入党し、杉並区から都議会議員選挙に数回出馬したほか、52年の「血のメーデー事件」後の騒乱容疑によって、折から個展開催中の和歌山県新宮市で

検挙拘留されたこともあった（9）。

1949年、「民間伝承の会」は日本民俗学会に改編され、日本全国限なく会員がいるという意味では既に研究組織としては確固たる地歩を築き、戦前戦中を通じて見られた「アマチュアの学問」という性格は払拭されつつあった。その中で橋浦の画会もまた、「民俗画家」として地元研究者から事業を通じて支援を受け、同地で信頼関係を築いていくという当初の組織化に関わる役目を終えたといえよう。

ただしここで新しい問題が浮上してくる。「民間伝承の会」が「学会」となったことと前後して、少なからず退会する者が目立ったという現象が起こったのである（10）。多くの場合、それらの退会者は職業的に民俗学を専攻したわけではない、まさに自身の興味に従って民俗学に近づいた人々だった。「学会」化することによって、「民間伝承の会」は、もともとその体内に抱えていた素人、アマチュアの集団の一定数を失ったのである。また、それは退会者からの眼に、新しい学会は別の組織に移ったことも示唆している。組織家として橋浦が役目を終えたのが、ほぼこの時期にあたることは、学問と組織の両面にわたって橋浦の眼差しは、「学会」となる以前の、多くのアマチュアを抱えていた民俗学に向けられたものだったといえよう。その意味で橋浦の手がけた組織のあり方は戦後の「学会」化によって、多くの部分が削がれていった。

しかし橋浦自身が作った人脈は民俗学という組織を離れて、依然として戦後も生き続けた。その証左とも言うべきものが、1969年4月20日、西荻窪で催された「橋浦さんをねぎらう会」である。既に1962年夏、柳田国男は死去しており、あくまで橋浦個人を祝うための会だった。

約150名の出席者は民俗学、美術、生活協同組合（かつての消費組合活動）、友人、その他の分類となっているが、やはり民俗学の関係者が群を抜いている（11）。名前が挙がっているのは、岡正雄をはじめ、比嘉春潮、宮本常一など草創期の民俗学を担った面々から若手では宮田

登、坪井洋文、竹田旦に到るまで幅広い層にわたっている。その中には橋浦が培った地方の民俗学者の名前の散見される。特に目を引くのは勘内の子息、胡桃沢友男が名を連ねていることである。NHKに勤務する傍ら民俗学者として活動した胡桃沢友男は勘内の死後も橋浦との間に行き来があり、親子二代にわたって交流を続けた。

ここに見るように橋浦の作った民俗学の人脈は、非常に長期にわたるものであり、しばしば二世代にまたがって続くこともあった。こうした人的交流は、あきらかに採集、報告、比較総合という体制化される以前の、あくまで興味、好奇心に根ざした世界が、「民俗画家」橋浦を触媒に醸成され、長期にわたって地方に浸透したことを示唆しているのではないか。

その意味に於いて柳田民俗学の体制そのものも、今一度、受け手たる地方の側から再検討する必要があるといえよう。

【注】

- （1）近年の成果として松本三喜夫『野の手帳 柳田国男と小さき者のまなざし』（青弓社 1996年）は、丹念に1930年代を中心に地方の郷土誌を担った研究者の足跡をたどり、彼らと柳田の交流を跡づけている。その過程で浮かび上がってくるのは、中央での学界をめぐる葛藤から地方では自由であることから、むしろ地方に於いて自身の本音を吐露することが多かった、柳田の姿である。
- （2）拙稿『橋浦泰雄伝』（晶文社 2000年）。それまでの橋浦泰雄に関しては、柳田に師事したマルクス主義者の筆頭と目される反面、柳田の理論とマルクス主義が容易に整合できると考えた「楽天的マルクス主義者」という評価が一般的だったが、本書では、橋浦泰雄旧蔵の文書（蔵書、書簡、パンフレット、日記など。これらを総称して「橋浦泰雄関係文書」とした）を読み解くことによって、橋浦の組織家・実践者という側面から彼の民俗学に独自の営みがあることを検証した。

- (3) 「橋浦泰雄氏に聞く」 (『美術運動』 1974年7月号) 54~55頁。
- (4) 1946年6月28日付 山崎今朝弥から橋浦宛書簡 (☆)。
- (5) 胡桃沢勘内 (1885~1940) は長年、松本銀行に勤務したのち丸松商事株式会社常務に就任し、談話会「話をきく会」を組織するなど、民間から信州郷土研究を支えた。
- (6) 橋浦泰雄日記 1934年分 ページ数なし (☆)。「日記」を付け始めたことから類推して、橋浦が運動から離脱したのはこれ以前と考えられる。
- (7) 「橋浦泰雄君民俗風景小品個展」 (パンフレット) より抜粋 (☆)。
- (8) 守随一による「橋浦泰雄画会 会計帖」より (☆)。
- (9) 1953年1月19日付 『毎日新聞』「橋浦氏、紀州で逮捕」
- (10) 1998年6月27日、小国喜弘氏の教示による。
- (11) 「橋浦さんをねぎらう会出席者名簿 (敬称略)」 (プリント☆)

☆をつけた資料は「橋浦泰雄関係文書」所収のもの。